

後の時間帯で教育支援を行っている。ここでは保護者が視覚障害児のよりよい育児の方法を学び、視覚障害に関する情報を得たり、保護者同士の交流を図ることをねらいとし、集団で定期的に育児支援、発達支援、家族支援にあたっている。形態は、親子で遊ぶグループ活動とテーマを設けて話し合うミニ講座の組み合わせである。この育児学級参加へのきっかけには、学校のホームページ、病院に置かれたパンフレット、病院で他の母親から、眼科医や保健師の紹介などがあつた。

3. 指定討論者を含めた全体討論

指定討論者より、全国調査の結果(2008, 柿澤)から視覚障害のある乳幼児の重複障害の割合が進んでいる実態について解説があつた。それを踏まえ、超早期からの支援が必要であること、また、この三者の実践は全国的にみても先進的な取り組みであり、その開始の工夫と継続への手だてについて質問がなされた。山口氏の取り組みは眼科医個人としての努力で行っており、診療報酬とのかねあいもあつて、病院としての対応はできにくいという大きな課題が提示された。一方、この超早期の支援は全国の盲学校が地域の視覚障害教育のセンターとして担う役割として今後ますますの充実が求められる。しかし、担当者の専門性が不可欠であり、医療や福祉機関などと広く連携することも重要であつて、課題は教員の異動であることが指摘された。(文責 猪平眞理)

自主シンポジウム 15

広汎性発達障害の治療教育 プログラムの展開 (2)

— 社会性の障害とその支援を中心に —

- 企画者 渡部 匡隆 (横浜国立大学)
岡村 章司 (横浜市立港南台ひの特別支援学校)
- 司会者 渡部 匡隆 (横浜国立大学)
岡村 章司 (横浜市立港南台ひの特別支援学校)
- 話題提供者 安達 潤 (北海道教育大学)
井上 雅彦 (鳥取大学)
衛藤 裕司 (大分大学)
- 指定討論者 小林 重雄 (名古屋経済大学)

1. 企画趣旨

平成19年度の日本特殊教育学会において、広汎性発達障害のある児童生徒の社会参加や社会的自立を援助するための新たな治療教育プログラムの開発をねらいとした自主シンポジウムを開催した。そこで、①社会性の障害の分析と支援のあり方の検討、②通常の学級など自然な環境における支援の仕組みづくりと支援者の実行条件の整理と分析、③社会性の障害を含む個々の的確なアセスメントと支援方法の開発の必要性が提起された。本年度は、その中で社会性の障害の分析とその支援のあり方に焦点をあてて、3名の先生から話題提供をいただき、指定討論の先生と参加者を交えて討議を行った。

2. 話題提供と討論

安達先生からは、「広汎性発達障害の認知特性から社会性困難の成り立ちと支援を考える」と題して、話題提供をいただいた。知的障害を伴わないアスペルガー障害当事者の主観的体験や実験研究をもとに、広汎性発達障害の認知特性として「情報過多による混乱」があると指摘された。そのため自然な体験のみでは一般的な「ものの見方」が獲得できにくく、また共通の体験をもちづらいため社会性困難が生じるとされた。したがって、社会性の困難については個々の情報の捉え方や処理モードに適した支援が必要であるとされた。その具体的な支援方法については、ソーシャルストーリー、コミック会話、ソックス法、5段階表の活用などが有効であるとされ、子どものタイプに応じて

環境面、行動面、それに認知面の3つの要素からアプローチしていくことが必要であるとされた。

井上先生からは、「自閉症児の社会的行動の困難性とその指導—他者理解から自己制御まで—」と題して話題提供をいただいた。Eisenberg (1986) の向社会的行動モデルに基づき、社会的行動のプロセスとして、① 他者の要求に関する状況を解釈し他者の要求に気づく過程、② 要求に気づいてから助けるかどうか決意するまでの過程、③ 意思決定が行為に移される過程を指摘された。それらの各過程を踏まえて社会的行動が成立するためには、社会的文脈理解の困難に対して弁別刺激の機能化、社会的スキルの未学習に対して社会的行動のレパートリーの形成、社会的文脈による自己制御の不全に対して選択行動の強化システムからのアプローチと支援が必要であるとされた。その上で、社会的行動の成立のための環境設定と行動形成からのアプローチの枠組みを提示された。

衛藤先生からは、「社会性の障害に関する治療教育の再考—成人後の余暇の在り様から—」と題して話題提供をいただいた。自験例として、学齢期から継続的に支援を行い成人期を迎えた自閉症者の余暇の実態から、本人の幼児期からの好みが発展した余暇と、人・地域社会とかかわる余暇に大きく分けられることを見出された。その結果に基づき、本人の好みを発展させるための余暇の指導内容として課題のタイプ（増加・発展）、鍵となる活動とそのスキル、その展開のための教育課程を示され、人・地域社会とかかわる余暇の指導内容として課題（人とのネットワークづくり・機会の提供）、鍵となる活動とスキル、その展開のための教育課程について示された。最後に、社会性の発達における遊びの意義について示唆された。

以上の話題提供に対して、指定討論の先生のご意見を軸としながら参加者を含めて社会性の概念・捉え方、社会性の成立を阻む要因、社会性の支援へのアプローチとその方法、最後に今後の治療教育のあり方について討議を行った。3名の先生からの話題提供は、社会性の成立を困難にしている認知特性をきちんと理解しながら、学校、家庭、地域の中でいままさに生じている社会性の問題を解決するためにさまざまな支援技法を組み上げながら対処していくとともに、向社会的行動が成立するための行動分析的な治療教育プログラムの開発とその実施が求められているとされた。今後、社会性の概念を整理しつつ、実証的にそのプログラムづくりを進めていく必要がある。

自主シンポジウム 16

個のニーズへの対応から考える重度・重複障害児の視機能評価 (2)

—視覚障害教育資源センターとしての盲学校の役割と養護学校等との連携・協力を考える—

企画者 佐島 毅 (筑波大学)
小林 秀之 (広島大学)
司会者 佐島 毅 (筑波大学)
話題提供者 白井百合子 (大分県立盲学校)
葉袋 愛 (山梨県立盲学校)
佐島 毅 (筑波大学)
指定討論者 小林 秀之 (広島大学)

1. 企画趣旨

幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し適切な指導および必要な支援を行うという特別支援教育の理念を実践するにあたり、障害の重度・重複した児童生徒の教育では「重複する個々の障害の適切なアセスメント」とそれに基づく指導が最も大きな課題のひとつとなっており、重度・重複障害児の視覚機能の評価とその実態に応じた指導・教材教具の工夫等は、今後非常に重要な課題になると考える。本シンポジウムでは、視覚障害教育専門教員が養護学校等へ視機能評価に関する支援を行ってきた実践を、話題提供として実践的かつ多面的な視点から議論をすすめる、視覚障害教育資源センターとしての盲学校の役割と養護学校等との連携・協力を考えることとした。

2. 話題提供の要旨

(1) 知的障害養護学校における TAC II を使用した視機能評価の取り組み (白井氏)：白井氏は、在籍児童生徒の8割が標準的な視力検査の実施が難しい一方で、見え方が気になる生徒は2割いるという現状と、TAC II による視機能評価を試みたところ大きな成果があり、特別支援学校 (知的障害) においても児童の視力評価が重要であることを強調した。また、検査への反応を引き出す具体的な配慮・工夫点と、複数回実施することの重要性について、示唆に富んだ指摘があった。さらに、大分盲学校における視機能評価の取り組みの概要と、地域支援活動として養護学校や小中学校への問い合わせの増加の現状と巡回相談の実践について報告があった。